



大阪府立大学高専における人権教育の現状と課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鯨坂, 誠之, 伏見, 裕子, 金田, 忠裕, 高橋, 舞, 中田, 裕一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017217

大阪府立大学高専における人権教育の現状と課題

鯨坂誠之*, 伏見裕子**, 金田忠裕***, 高橋舞****, 中田裕一**

Current Status and Issues of Human Rights Education in Osaka Prefecture University College of Technology

Shigeyuki AJISAKA*, Yuko FUSHIMI**, Tadahiro KANEDA***,
Mai TAKAHASHI**** and Yuichi NAKATA**

要旨

本稿は、大阪府立大学工業高等専門学校における人権教育の現状を概観するとともに、学生が「振り返りシート」に記載した自由記述のテキスト分析を通じて、今後の人権教育を充実させていくための具体的な課題を明らかにすることを目的とする。その結果、おおよそどの学年も各テーマに対する理解や新しい発見・気づきが得られていることが確認された。しかしながら一部のテーマでは、学生が本校入学以前に類似の内容を学習していることに起因して、テーマを一般化または相対化して捉えられない場合があることが明らかとなった。また、今後の課題として、振り返りシートの中に質問の意図が伝わりにくい表現があるため再考が求められる点と、人権教育のテーマに関する学習レベルや学習機会の有無などを事前に把握しておく必要がある点が示唆された。

キーワード: 人権教育, ふらっと高専, 計量テキスト分析, 共起ネットワーク分析

1. 研究目的

本稿は、大阪府立大学工業高等専門学校（以下、本校）における人権教育の現状を概観するとともに、学生が「振り返りシート」に記載した自由記述のテキスト分析を通じて、今後の人権教育を充実させていくための具体的な課題を明らかにすることを目的とする。

既報^①では、本校の人権教育が基本的に道徳教育や学生指導とは一線を画するかたちで位置づけられてきた歴史を有することや、2018年度以降は1年生から5年生までを対象とした年間計画に基づく方針が策定された経緯などが記されている。なお現在、本校の人権教育では、「わたしたちを取り巻く環境において、個々人が理不尽でない関係性を積極的に保つ」ことを目標に掲げ、その取り組みのことを「ふらっと高専」と定義している。本稿では、第2章でこの人権教育「ふらっと高専」における2019年度

の取り組み^{注1}を全体的に振り返り、第3章では取り組みの中から特徴的なテーマを一つ取り上げ、アンケート調査の自由記述に基づくテキスト分析を通じて、具体的な課題を明らかにする。

2. 「ふらっと高専」における2019年度の取り組み

2-1. 取り組みの概要

「ふらっと高専」で取り扱う「人権」とは、人間として普遍的に保障されるべき権利を意味しており、個々人が理不尽な扱いを受けることなく、人間らしく生きることが保障されるものと位置付けている。今まで、あたりまえと思っていたことがらを「本当にそうなの？」と問い直し、少数派の意見についても考えるなど、様々な視点から人権について考え、多様性を尊重しあえる人材を育てることが目的である。「ふらっと高専」の1年生では人権に関する基本的な理解を促すために、「身近な差別への気づき」をテーマとしている。2年生では生き方の選択肢を広げることができるよう、身近な常識を問うことのできる「多様性への理解」をテーマとしている。多様性がテーマとなるため、年度によってその対象はジェンダー、子ども、国籍、身分など様々な設定することが可能である。3年生では障害とは何かを考えることを促すために「声をあげる権利」をテーマとしている。このように学年が上が

2020年9月15日 受理

* 総合工学システム学科 都市環境コース

(Dept. of Technological Systems : Civil Engineering and Environment Course)

** 一般科目 (General Education)

*** メカトロニクスコース (Mechatronics Course)

**** 保健室 (Nurse's Office)

るごとに応用・実践に向かっていく。4年生では外国にルーツを持つ人々などの課題やカミングアウトについて考えることを促し、そうした内容を受け入れることができる「環境づくり」をテーマとしている。最後に、卒業を控えた学年である5年生では困窮した状況下の生活を支援する活動を学び、現場から人権を考えることを促すために、「社会人となる準備」をテーマとしている。このように年間計画で各テーマを設定した上で、「講演会」と「フィールドワーク」を企画している^{2)～5),注2)}。「講演会」は各テーマの内容をきちんと理解させつつ、新たな発見・気づきを得てもらおうとともに、今までステレオタイプな思い込みであまりまえと思っていたことがらを問い直す視点を身につけてもらうことを目的としている。「フィールドワーク」は各学年のテーマをふまえ現場における他

者とのグループワーク等を通じて理解を深めてもらうことを目的としている。2019年度の「講演会」は、年間計画に従っておおむね予定通り実施できたが、3月に実施が予定されていた「フィールドワーク」は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)対策のため中止となってしまった。そこで本稿では「講演会」についてのみ、振り返りを行う。

2-2. 全体的な振り返り

表1は2019年度の人権教育講演会のテーマと実施内容の一覧を、表2は「振り返りシート」を用いたアンケート調査で出題した質問内容を示す。アンケート調査は、各講演会の終了時にマークシート式の選択肢と自由記述欄のある「振り返りシート」を配布し、その場で回収する方法で行われた。表3は回答結果の割合(%)を示す。

表1 2019年度の人権教育講演会のテーマと実施内容の一覧

テーマ	「ふらっと高専の取り組み ～人権の基本的な理解～」	
1	「ふらっと高専」の取り組みについて、また、人権の基本的な理解について講演が行われた。「ふらっと高専」の“ふらっと”とは、「わたしたちを取り巻く環境において、個々人が理不尽でない関係性を積極的に保つ」ことである旨を説明するとともに、「自分の思いの押し付け」「これまでそうだった」「他人事」の3つのキーワードをテーマとした穴埋めクイズが出題された。最後に、多様な社会(人間)との関係はデリケートな調整を必要とすること、またその調整の仕方に正しい仕方や正解を求めめるのではなく、試行錯誤することが重要であることが説明された。	実施日:2019年4月25日 講演者:本校教員 対象学年:1年生 出席数:164名
2	「多様性への理解(一般常識を問う)～生き方の選択肢を広げる(子どもの人権)～」 子どもは権利の主体であるといった「子どもの人権」について広く学ぶための講演会を実施し、子どもへの支援がなぜ必要なのかを問うお話を頂いた。クイズ形式のスライドやミニワークを挟みながら子どもの人権・子どもの権利について分かりやすく講演頂いた。ミニワークでは子どもの権利条約の条項が記載されたカードを配布しグルーピングを行い、問題意識を高める工夫がなされていた。学生らはなぜ子どもへの支援が必要なのかを考える機会を得た。	実施日:2019年9月18日 講演者:外部講師 対象学年:2年生 出席数:156名
3	「障害とは何か?～障害となる事象について考える」 「障害」となる事象は社会の側がつくっているという「障害の社会モデル」に基づき、「障害とは何か?」を学生に考えさせることを目的とした講演会であった。社会の側にある障壁(バリア)がなくなるように調整するためには「合理的配慮」が必要であること、それを支える法律ができたこと、合理的配慮とテクノロジーの発展には密接な関係があることなどが丁寧に解説され、学生の立場や関心に寄り添った内容であった。	実施日:2019年6月19日 講演者:外部講師 対象学年:3年生 出席数:161名
4	「さまざまな状況での関係づくりを考える ～外国にルーツを持つ人々などの課題を考える」 外国にルーツをもつ講師を迎え、ご自身のライフストーリーを語っていただくとともに、在日韓国朝鮮人をはじめとする在日外国人の方々の暮らしや課題について講演して頂いた。また、民族楽器を用いた楽器演奏や学生との合唱も行って頂き、民族の違いを超えた交流の機会となった。	実施日:2019年5月15日 講演者:外部講師 対象学年:4年生 出席数:129名
5	「現場から人権を考える ～困窮した状況下の生活を支援する活動を学ぶ～」 釜ヶ崎の日雇い労働者の置かれている状況を例に、制度があっても使えない現状や、日雇い労働者が経済的困窮に陥る社会の構造について丁寧に説明された。自己責任と思われがちな問題について、本当にそうなのか?と学生たちに問いかけがなされた。	実施日:2019年8月6日 講演者:外部講師 対象学年:5年生 出席数:117名

表2 振り返りシートの質問内容

	質問内容	キーワード
質問1	この講演の内容を理解できましたか?	理解
質問2	この講演のテーマについて新しい発見がありましたか?	発見
質問3	この講演を通じて、今まであたりまえて思っていたことがらを「本当にそうなの?」と問い直すことができましたか?	問い直し

表3 振り返りシートの回答結果(割合%)

	テーマ1			テーマ2			テーマ3			テーマ4			テーマ5		
	質問1	質問2	質問3	質問1	質問2	質問3	質問1	質問2	質問3	質問1	質問2	質問3	質問1	質問2	質問3
YES	98.8%	81.1%	82.9%	96.8%	79.5%	—	93.2%	77.6%	71.4%	89.1%	77.5%	55.0%	90.6%	78.6%	70.9%
NO	0.6%	17.7%	15.9%	1.9%	18.6%	—	5.6%	19.3%	26.7%	9.3%	20.2%	39.5%	6.8%	17.9%	25.6%
未回答	0.6%	1.2%	1.2%	1.3%	1.9%	—	1.2%	3.1%	1.9%	1.6%	2.3%	5.4%	2.6%	3.4%	3.4%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	—	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

注) テーマ2の質問3は実施時にミスがあり意見収集できなかったため省略している。

質問1は、「この講演の内容を理解できましたか?」であり、概ねどのテーマについても90%以上かそれに近い割合で内容を理解できていることが明らかとなった。質問2は、「この講演のテーマについて新しい発見がありましたか?」であるが、70%以上となっており、概ね8割に近い割合で新しい発見が得られていることが分かる。質問3は、「この講演を通じて、今まであたりまえとっていたことがらを「本当にそうなの?」と問い直すことができましたか?」であったが、テーマ4のみ問い直しができるケースが55.0%と比較的低かった。そこで、その要因と今後の課題を明らかにするために、自由記述に記載されている内容からテキスト分析を行った。

2-3. 特徴が見られたテーマ4の講演概要

第3章で自由記述の内容を分析する前に、テーマ4の講演概要に触れておく。テーマ4「さまざまな状況での関係づくりを考える ～外国にルーツを持つ人々などの課題を考える」では外国にルーツをもつ講師を迎え、ご自身のライフストーリーを語っていただくとともに、在日韓国朝鮮人をはじめとする在日外国人の方々の暮らしや課題について講演して頂いた。また、民族楽器を用いた楽器演奏や学生との合唱も行っており、民族の違いを超えた交流の機会となった。

3. 自由記述に基づくテキスト分析

3-1. 分析方法

自由記述の分析には、形態素解析に基づく計量テキスト分析(共起ネットワーク分析)を行う。分析ソフトはKH Coder ver.3(樋口, 2015)を使用した。

形態素解析とは自然言語処理により文章を意味のある単語に区切り、品詞や内容を判別する手法である。その中でも共起ネットワーク分析とは、テキストデータ化された文中における「語」が出現パターンの似通った「ある語」との共起関係を「線」で結んだネットワーク図で可視化する手法^(6), 注3)である。この図の円が大きいほど語の出現回数が多いことを意味する(なお、出現回数が多い語でも共起関係が形成されない場合にはネットワーク図には現れない)。

3-2. 結果と考察

表4は形態素解析に基づき抽出された語の上位10語のリストを示す。

質問1は講演内容の「理解」の有無を問うものであるが、出現回数の多い語は[日本]>[韓国]>[差別]の順であり、「日本に住む外国人は今よりも昔のほうが差別を受けていたことが分かった」といった記述内容などが見られた。質問2は講演テーマについて「新しい発見」の有無を問うものであるが、出現回数の多い語は[音楽]>[韓国]>[日本]の順であり、とくに民族楽器を用いた音楽演奏が新たな発見を促す役割を果たしていた。質問3はこの講演を通じて、今まであたりまえとっていたことがらを「本当にそうなの?」と問い直すことができたかを問うものであるが、[思う]>[日本]>[差別]の順であり、日本における差別について多く思考されたことが明らかとなった。

次に、図1, 2は共起ネットワーク図を示す。回答の中でも質問3について問い直しができるケース(図1)、問い直しができなかったケース(図2)に分けて説明する。

3-2-1. 問い直しできたケースの特徴

表4 抽出語リスト 上位10語

<質問1-YES> (理解できた)		<質問1-NO> (理解できなかった)		<質問2-YES> (発見できた)		<質問2-NO> (発見できなかった)		<質問3-YES> (問い直してきた)		<質問3-NO> (問い直しできなかった)	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
日本	23	住む	4	音楽	22	音楽	3	思う	28	思う	9
韓国	18	分かる	4	韓国	18	人	3	日本	15	知る	7
差別	18	理解	4	日本	17	話	3	差別	14	あたりまえ	5
知る	18	歌	3	朝鮮	14	知る	2	外国人	13	今	4
人	16	人権	3	思う	13	発見	2	人	9	ニュース	3
分かる	15	伝える	3	知る	13	以前	1	違う	8	考える	3
音楽	13	ドイツ	2	国	10	違う	1	韓国	8	在日外国人	3
在日外国人	13	音楽	2	在日外国人	10	歌	1	在日	8	持つ	3
思う	13	外国人	2	歌	9	改めて	1	知る	8	自分	3
外国人	10	学習	2	在日	9	確認	1	朝鮮	6	多い	3
分析対象の総抽出語数	749語	分析対象の総抽出語数	128語	分析対象の総抽出語数	631語	分析対象の総抽出語数	60語	分析対象の総抽出語数	460語	分析対象の総抽出語数	187語
分析対象の単位文の数	133文	分析対象の単位文の数	17文	分析対象の単位文の数	108文	分析対象の単位文の数	12文	分析対象の単位文の数	61文	分析対象の単位文の数	38文

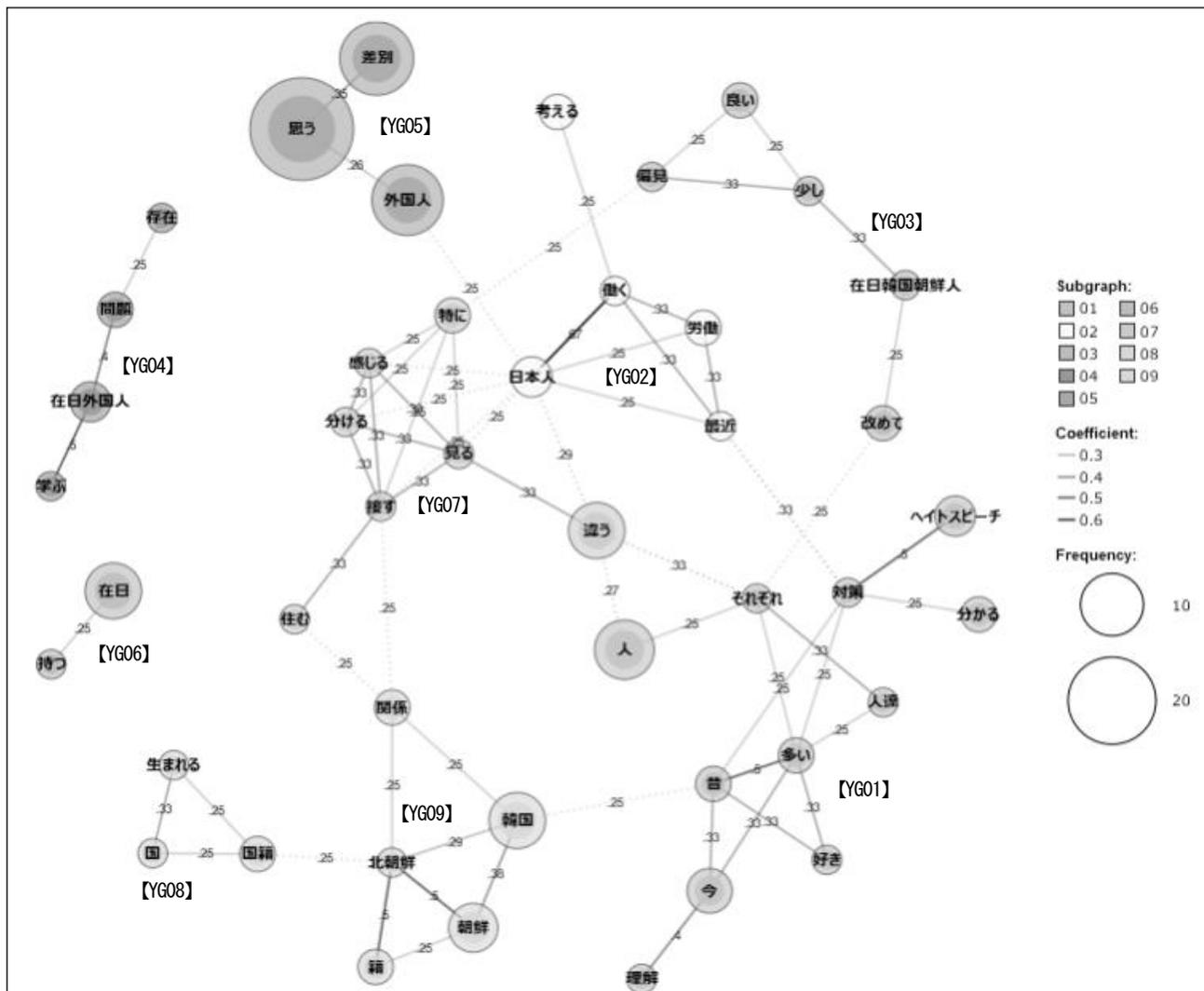
共起関係は 9 つのグループ (以下, YG01~YG09) に分類されることが明らかとなった。

9 つのグループの特徴を見ると, さらに大きく 3 つに大別される。そのうちの 1 つ目の特徴は, 国籍やルーツに対するステレオタイプなイメージを問い直す機会を得ることができたと捉えている点にある。例えば, 【YG02: スーパーなどで働く日本人と外国人の最近の労働問題を考えるいい機会となった。】は, 講演内容から派生して日常生活を思い返し, 講演内容では登場しなかった労働問題に

までテーマを一般化していると考えられる。【YG04: 在日外国人への差別の問題について学んだことを活かしていこうと思った。】についても, 具体性は乏しいものの, テーマを一般化して考えようとしていることが伺える。

2 つ目の特徴は, 1 つ目と同様に問い直す機会を得ることができたと捉えつつ, それを相対化している点にある。

例えば, 【YG03: 差別や偏見はなくならないと思うが, 少しでも在日韓国朝鮮人の方々の想いを汲み取れると良いと改めて思った。】, 【YG07: 日本に住む外国人も, 実際



<記述例>

- YG01: 人それぞれであるが, 昔とは異なり(韓国を)好きな人達が多いことや, 今までぼんやりと理解していた「ヘイトスピーチ対策法」などの用語が分かった。
- YG02: スーパーなどで働く日本人と外国人の最近の労働問題を考えるいい機会となった。
- YG03: 差別や偏見はなくならないと思うが, 少しでも在日韓国朝鮮人の方々の想いを汲み取れると良いと改めて思った。
- YG04: 在日外国人への差別の問題について学んだことを活かしていこうと思った。
- YG05: 日本では外国人に対するそこまでひどい差別がないと思っていた。
- YG06: 戦前の在日の人達が日本名を持たなければならなかったことを知った。
- YG07: 日本に住む外国人も, 実際に見ると特に違いはないので分け隔てなく接していく必要があると感じた。
- YG08: 生まれた国や国籍で差別することがあってはならないと思った。
- YG09: 日本で育っても韓国籍・朝鮮籍(北朝鮮の意味ではない)だからと差別される複雑な関係があると分かった。

図 1 共起ネットワーク図 (問い直しができたケースの特徴 YG01~YG09)

に見ると特に違いはないので分け隔てなく接していく必要があると感じた。】、さらに【YG08：生まれた国や国籍で差別することがあってはならないと思った。】は、いずれも自分の考え方が絶対ではなく、他者の存在や他者への接し方に対して平等に考えようとする姿勢が感じられる。

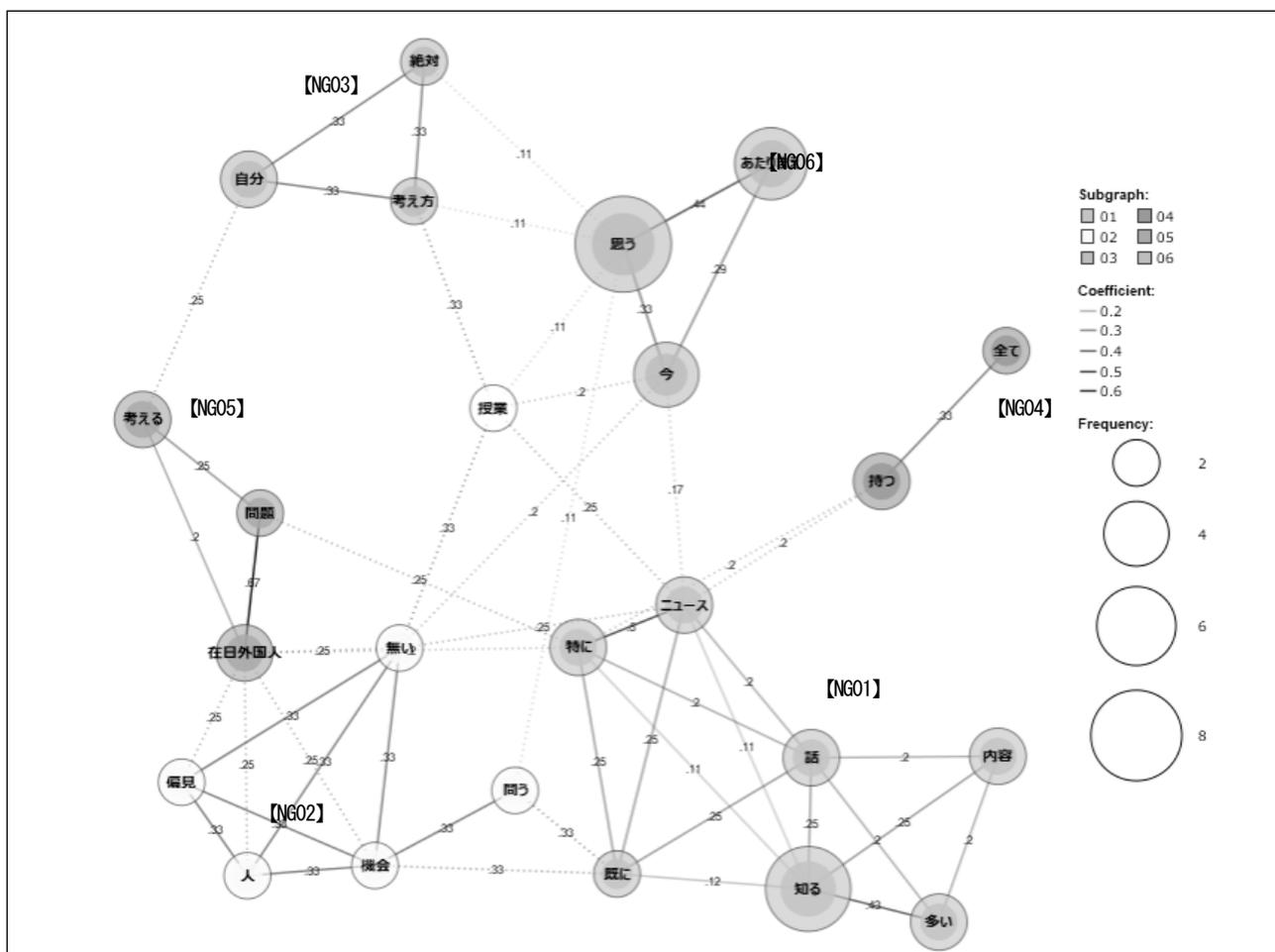
3つ目の特徴は、【YG01】、【YG05】、【YG06】、【YG09】に見られるように、今まで持っていなかった知識や自身の理解に対する発見的な内容となっており、講演テーマについて「新しい発見」の有無を問う質問2で回答してほしい内容と言い換えることもできる。

これは振り返りシートの質問3が、出題者側、すなわち我々の側の求めている意図^{註4)}を明確に伝える表現になっていなかったことに起因していると考えられるため、今後の課題とすべきであろう。

3-2-2. 問い直しができなかったケースの特徴

共起関係は6つのグループ（以下、NG01～NG06）に分類されることが明らかとなった。このケースについても、6つのグループの特徴を見ると、さらに大きく3つに大別される。1つ目の特徴は、既に何度も類似するテーマに触れており、問い直す機会を得ていたと捉えている点にある。例えば【NG01：ニュースで見たりしている上に、既に知っている内容の話が多かったので、特に興味を持ってなかった。】、【NG02：在日外国人と接する機会が多く、そもそも偏見もないため、問い直すことが思い浮かばなかった。】、さらに【NG06：今まであたりまえ、と思っていたことと異なることが無かった。】などが挙げられる。

高専生ともなると、本校入学以前の小学校や中学校において類似する人権教育の講演会などを既に聴講している学生もおり、今回のテーマでいうところの在日外国人



<記述例>

- NG01：ニュースで見たりしている上に、既に知っている内容の話が多かったので、特に興味を持ってなかった。
- NG02：在日外国人と接する機会が多く、そもそも偏見もないため、問い直すことが思い浮かばなかった。
- NG03：（講演の話）絶対とは決めつけず、一つの考え方として自分の中に残したい。
- NG04：全てを受け入れる広い心を持っている。
- NG05：在日外国人問題を考えたことが無かった。
- NG06：今まであたりまえ、と思っていたことと異なることが無かった。

図2 共起ネットワーク図（問い直しができなかったケースの特徴 NG01～NG06）

とも日常的に接する機会がある学生も一定数いたことが考えられ, そのため, 今回の講演会を契機として問い直すには至らなかったものと考察する. この点については, 今後, 事前に学生の人権教育に関する学習レベルや, 人権教育の学習機会の有無などを把握するとともに, その学習レベルに応じた人権教育のテーマの提供などを検討する必要があるだろう.

2 つ目の特徴は, 【NG05 : 在日外国人問題を考えたことが無かった.】のように, 学習機会を得ていなかったために問い直すことすらできなかつた, という点にある. これは先のケースと同様に, 質問 2 の回答として期待される内容とみなすこともできる. すなわち, 考えたことが無かった自分に気づけたこと自体が新たな発見であるという見方である. いずれにしても, 問い直しができなかったケースにおいても, このような回答が出てきていることから, やはり今後は質問 3 の再考が求められるといえる.

3 つ目は特徴的なまとまりが見られなかつたため, 「その他」としている.

4. まとめ

本稿では, 大阪府立大学高専における人権教育の現状を全体的に概観することで, 概ね, どの学年も各テーマに対する理解や新しい発見・気づきが得られていることが確認された. しかしながら, 一部のテーマにおいては, 本校入学以前に類似の内容を学習していることに起因して, テーマを一般化または相対化して捉えられない場合があることが明らかとなった. また, 今後の課題として, 振り返りシートの中に質問の意図が伝わりにくい表現があるため再考が求められる点と, 人権教育のテーマに関する学習レベルや, 人権教育の学習機会の有無などを事前に把握しておく必要がある点が示唆された.

注釈

注1) ふらっと高専では, 1~5 年生を対象とした人権教育だけでなく, 1~3 年生を対象としたセクシュアリティ教育も実施しているが, 本稿では人権教育に焦点を絞って取り上げるものとする.

注2) 文献 2 より, 教育工学の立場から定義される社会的構成主義では, 人間同士の関係のネットワークの中でコミュニケーションを介し, 協力して問題解決することで, さまざまな「社会的構成」を図っていくことをめざしている. また文

献 3~5 より, 学生による能動的な学習においては, この社会的構成主義の観点から教育が行われることが多い. そこで「ふらっと高専」では講演会を通じて個人の理解や新しい発見・気づきを促すとともに, フィールドワークによる個人間の共同作業などを通じた相互作用の中で社会的な生成・構成を図っていく.

注3) 文献 6 より, 共起ネットワーク分析では, 「語一語」間の共起関係に着目して, 記述内容の意味解釈を行う. 例えば, 「語 A」が「ある語 B」と共起関係にある場合,

a : ある語 B が, 語 A の前後で出現した回数 (共起回数)

F_1 : 語 A がデータ全体で出現した回数

F_2 : ある語 B がデータ全体で出現した回数 とした場合,

次の式が成り立つ.

$$Jaccard = \frac{a}{F_1 + F_2 - a}$$

これを Jaccard 係数といい, 条件付き確率を示す. 共起とは, 対象となる語が指定した条件に当てはまる文の中で, その語がいくつの文中で出現したのか, を意味しており, 共起回数はその出現回数を示す. Jaccard 係数が 1 に近づくほど, その共起関係が強いことを意味する.

注4) 振り返りシートの質問 3 における出題者側の意図は, あたりまえを問い直すことで, この講演内容を他の場面でも応用して考えることが出来るか否かを問うことにあつた. しかしながら, 記述内容のテキスト分析結果をみると, 新たな発見の内容と誤解してしまう傾向も見られた. 今回, テキスト分析を行うことでそのような学生が一定数いることが明らかとなったものの, より明確に意図を伝えるためには, 質問 3 の再考を今後の課題にすべきと考察している.

参考文献

- [1] 伏見裕子, 鯨坂誠之 他 : 大阪府立大学高専における人権教育の歩みと展望, 大阪府立大学高専研究紀要, 第 53 巻, pp. 15-20, 2020 年 1 月
- [2] 日本教育工学会編 : 教育工学事典, 実教出版, 第 1 刷, 2000 年 6 月
- [3] ダネル・スティーブンス, アンソニア・レビ (佐藤浩章監訳) : 大学教員のためのルーブリック評価入門, 玉川大学出版部, 初版第 6 刷, 2016 年 9 月
- [4] 溝上慎一 : アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換, 東信堂, 初版第 8 刷, 2016 年 12 月
- [5] 菅井勝雄 : 「教育システム」の研究動向, 日本教育工学会論文誌, 第 21 巻(4), pp. 203-208, 1998 年 3 月
- [6] 樋口耕一 : 社会調査のための計量テキスト分析, 第 2 版, 2020 年 4 月

(本研究は JSPS 科研費 JP20K02988 の助成を受けたものである.)